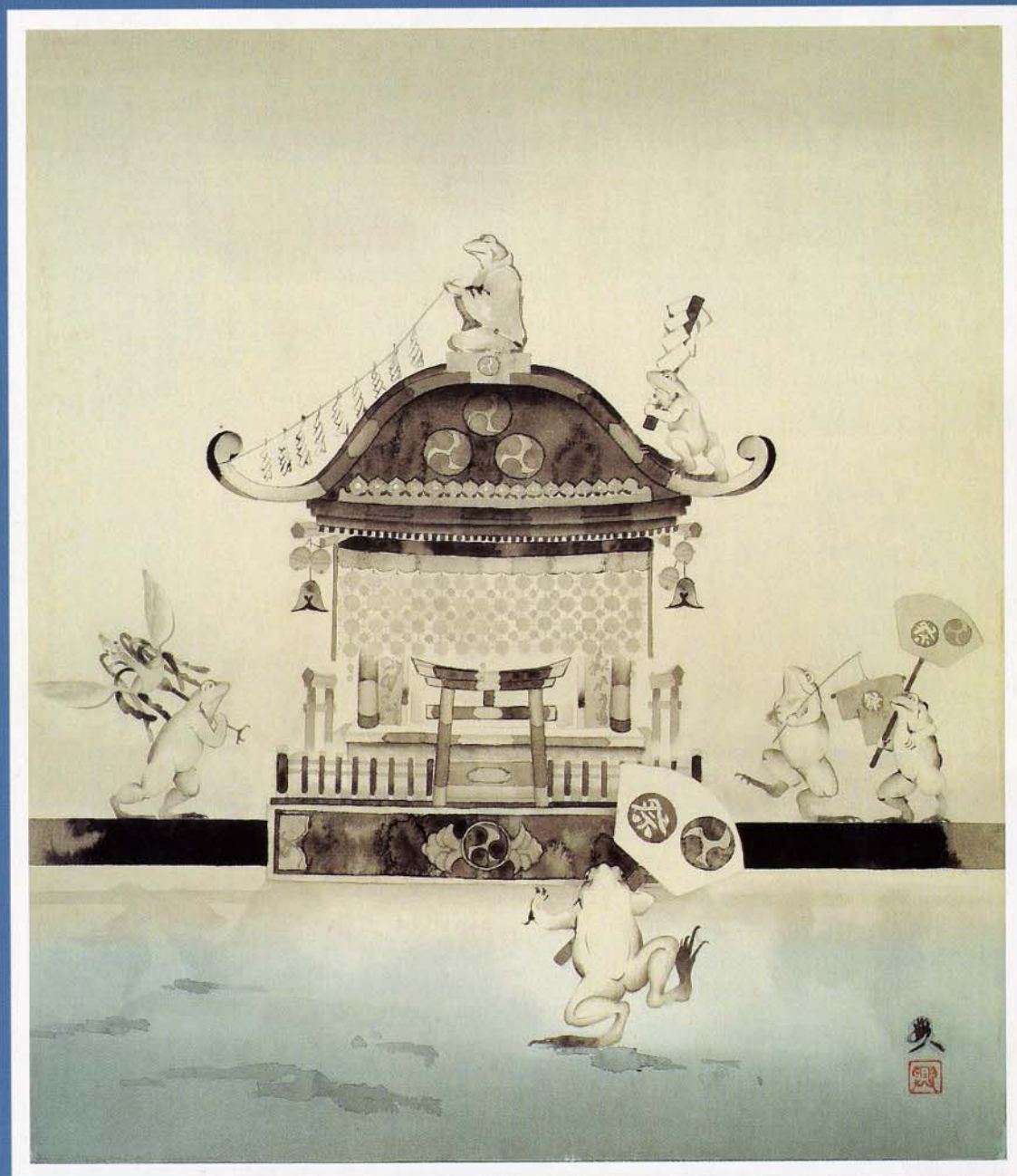


杜乃杵

秩父神社社報
杵乃杜(ははそのもり)

第 31 号

平成17年 7月20日
(川 瀬 祭)



森と水、そして生命^{いのち}

さあ！ ことしもまた、夏のお祭となりました。

暑い夏の日ざしに負けない、元気な子供たちが主役のお祭です。

子供たちに人気の高い暴れん坊の、スサノヲという神さまを迎える祭です。

宵宮の天王柱立^{てんのうばしらだてしんじ}神事^{ひのみきぎ}には、日御碕^{ひのみきぎ}というお宮からご神体を迎えるのです。

スサノヲの神さまは、大むかし日本の国中に豊かな森を育てた神さま——、
そのおかげで、山々の森が水をたくわえて田んぼをうるおし、川から海へ、
たくさんの生きものが栄えて、ひとびとの生活を支えてくれるのです。

本まつりのお川瀬神事は、この森と水に恵まれる生命の神秘的な力に感謝し、
どうか、ふるさと未来を担う子供たちに幸あれ——と祈る祭なのです。

解説 秩父神社 (30)

秩父神社権禰宜 甲田豊治

◆ 社殿を彩る彫刻たち

今号より、秩父神社解説を担当させて戴くこととなり、夏号では主に社殿彫刻の解説、冬号では妙見様に因んだお話をお伝えできればと考えている。このたびの表紙では、「神輿とカエル」が題材になっていることから、社殿彫刻にも「カエル」は居ないものかと探してみたところ、幣殿東側に何とも奇妙なカエル（蝦蟇）が彫刻されていることから、今



回はこのカエルに因み、蝦蟇（がま）仙人とその隣にいる李鉄拐（りてつかい）の仙人を解説する。

一般の参拝者からは、寅の門の屋根や本殿東側に左甚五郎作の「つなぎの龍」があることから、説明されなければ見過ごしてしまう東側幣殿の彫刻群。そのなかに蝦蟇仙人と鉄拐仙人の姿を見ることが出来る。

この二人の仙人は、日本人に馴染みのある七福神のエビス・ダイコクの図象と同様に、対で描かれることが多い。古くは十三世紀後半に活躍した道釈人物画家である顔輝の作品は大変有名で、日本においては、雪村や光琳、蕭白などこの二人の仙人をモチーフにした作品が伝わっている。

蝦蟇（がま）仙人

蝦蟇仙人には、終南山に仙術を学んだと言われる中国金代の劉海蟾（りゅうかいせん）説や蝦蟇を使つては妖術を行つたとされる呉の葛玄（かつげん）説、また葉売りの候（こう）先生など諸説伝わっている。

当社の蝦蟇仙人は、肩に三本足らしき蝦蟇を抱き、その蝦蟇の口からは赤い妖気らしきものを吐き出している図象で彫刻されていることから、劉海蟾もしくは葛玄の

説が当てはまるのではないかと見られる。

因みに葉売りの候先生は、その本人自身が蝦蟇であり、水の中で泳ぐ姿はまさに巨大なカエルと伝わっている。叱られるかもしれないが、この度の表紙を描かれた古館先生も名前が「興」（こう）である。先生のその存在感から、もしかしたら、この方は興先生ではなく候先生なのではないかと思うところがある。

李鉄拐（りてつかい）

鉄拐は、本来かなり体格がしっかりしていたと伝わるが、当社の彫刻にはその面影はない。なぜなら、これには鉄拐の特徴がある。

ある時、鉄拐は華山で老君と会うこととなり、弟子に「わたしの魂は、しばらくこの身体から抜け出るが、七日経つても戻らないようであれば、この身体を焼いてもいいが、それまでは動かさずにこのままの状態にしておくように。」と言いつ残し出かけていってしまったところ、六日目のこと弟子の母親が死んでしまい、急に家に戻らなくてはいけなくなったため、残り一日待たずに鉄拐の身体を焼いて帰ってしまった。ようやく七日目になって帰ってきた鉄拐は、自分の身体が焼かれてしまい、魂が



身体に戻ることが叶わず困ってしまった。近くを見回すと、道端で乞食が飢えて横たわっているのが目に入り、仕方なくその身体に魂を入れ、再生することができたのである。

このことから、鉄拐がボロを身にまとった姿で表現されることが多く、当社の社殿彫刻もその姿で尚且つ口から再び魂が抜け出している姿で表現されている。

大祭期間のご神馬奉納の儀や、古くは秘法寅儀法の際だけに参進するこの寅の門の正面に「蘇りの仙人」が彫刻されていることは、特別な意味があるものと思われる。

「森の文化」内外に問う

社叢学会の「愛知万博」参加

宮司 蘭田 稔

愛知万博もほぼ開催期間の半ばを迎えて、どうやら期間中一、五〇〇万人の予想を上まわる観客の数字を期待できそうである。

われら社叢学会が屋外展示として出展した「天空・鎮守の森」と「千年の森」も、青葉若葉の初夏の季節を迎えて、ようやく企画当初に期待したイメージを満たすようになった。

長久手会場の真ん中、万博呼び物のマンモスを展示しているグローバル・ハウスに寄り添って立つパイオ・ラング（緑化壁）の二本の塔は、会場のどこから見通すことができるから、その上に樹林の植え込みがあることは誰でも目にするのだが、それが本学会の苦心した「鎮守の森」だと気づいてくれる人が果たして何人いるか、はなはだ心もとない。

それに引き替え、東ゲート近くの丘陵を活用して造成した「千年の森」は、小さいながらも既存の落葉樹林に数種類の常緑樹を適度に植栽して里山の理想的な社叢のたたずまいを提案できた、いささか自負しているが、なにせ話題のパビリオンやグローバル・コモンの外国館から離れた会場の片隅にあるので、よほどの情報通か偶然迷い込んだかという人たちの、それでも日に平均して一〇〇人ほどが立ち寄ってくれる程度である。



「とぶさ」の鎮め 愛知万博長久手会場

五〇メートルほどの参道を登ると、やや開けた一角に四阿（あずまや）があつて、休息しながら本会制作の「日本は森の国」というハイビジョン映像作品を鑑賞してもらい、またその向かいの緑陰に女流彫刻家、緋月真歩さん制作の「鳥総（とぶさ）の鎮め」という素敵な木彫作品を眺めることができる。大木の切り株に鶏冠をもつ鳥人の上半身がすくと立つ——その作品は、昔の樵夫（きこり）が切り株に頂上のこずえを「とぶさ」に挿して樹霊をまつり、木の再生を祈ったという風習をモチーフに、森と命の尊さを語りかけている。

また四阿を出て木立のあいだを辿ると、その奥に巨大な石組みに面した白砂の庭に出る。深い森の木立に囲まれたこの「石の広場」こそは、沖縄のウタキ（御嶽）や古代の磐座（いわくら）を想わしめる霊地のしつらえなのだが、今はその静寂と冷気に誘われて、巨大な石舞台に遠慮なく腰掛けて休む者も多い。

○

そもそも社叢学会の理事会に、かくいう私が提案して万博出展の企画立案が認められたのは、学会が今から丸三年前に発足して半年ほど経ったばかりの平成十四年の秋であつた。

愛知万博が「自然の叡智」をテーマとし、地球環境の保全を問う画期的な国際博覧会であり、なによりも日本で開催するからには、「鎮守の森」の名があるように古代から森を育て森に生きてきた伝統文化を改めて内外に問いかけること、また折りよく伊勢神宮の式年遷宮という、まさに森の文化を代表する二〇年ぶりの大事業が万

博開催中に開始され、なかでもこの六月三日には最も尊い御神木を木曾の山中で伐採する古式の神事「御杣始祭（みそまはじめさい）」もあることから、全体テーマを「森に生きる日本文化」として社叢学会が万博に出展参加することにしたのである。

それから一年ほどは学会役員を中心の企画委員会が実現可能な出展内容を練りあげた結果、三種類

五項目の企画について出展実行委員会の下でどうやら実現に漕ぎ着けたのが、先に紹介した「天空・鎮守の森」と「千年の森」という二つの屋外出展と合わせて、すでに今月三日に開催し終えた愛・地球広場での「遷宮奉祝イベント」と翌四日に尾張一宮の真清田神社で開催した万博出展記念の国際シンポジウム「森、水と



森と命の尊さを語りかける木彫り「鳥

いのち」という二つの記念行事、それに現在も制作中のハイビジョン映像作品「日本は森の国」シリーズ六本を加えると、都合五つの出展ということになる。

これから今秋の九月二十五日まで残る三ヶ月の開催期間中に果たしてどの程度、われら社叢学会が訴える森林文化の出展が一般の来場者に理解されるか——内容が地味であるだけに大きな期待はできかねるが、それでも本学会の多くの会員はもちろんのこと、伊勢神宮をはじめ全国の神社界や文化団体が実に幅広くこれらの企画出展に参加していただいたことは、それなりに画期的なことだと実感している。

（平成十七年六月二十六日付 中日新聞朝刊文化欄に寄稿の記事を転載）

【表紙解説】

この度の表紙絵は、秩父市吉田にお住まいの水墨画家古館 興先生の作品を掲載させて頂きました。

先生には、以前社報第十八号でも作品を紹介させて頂きましたが、今回は、川瀬夏祭り号の表紙絵ということで、「お神輿と力エル」という設定で描かれ、まさしく夏祭りに相応しい作品ではないかと感じます。

先生は二十年来力エルを描き続けられ、力エルの習性や力エルを取り巻く環境までも熟知され、力エルにも十四十色でさまざまな個性ある力エルたちが居るとのことです。



また、この度の作品に関しまして、先生からコメントを戴いておりますので紹介致します。

自然環境に一番敏感と言われる両生類が我々環境の指針と言えるなら、力エル達は人間の影の部分を背負っているのかもしれない。それにしても、気まぐれな人間によって（幸せガエル）（金を持って力エル）（無事力エル）・・・愚弄されたり時に神仙化されたり心ゲームもはなはだしい。そう言う自分も力エル擬態を通して表現しようとしています。

水恋しい夏の日、身体についた汚点のアカを洗い清めようと水に連なる祭の列を見ている水中の力エル達、「黄泉ガエル」の黄泉の国から帰った人達、もしかして我々は力エルの生まれ変わりかもしれません。

伊勢神宮参拝と愛知万博

「愛・地球博」研修視察

氏子青年会事業部長 木村善明

六月三日・四日、秩父神社氏子青年会の研修旅行に参加致しました。

一日目は、愛・地球博で行われる「神宮式年遷宮御杣始祭」伝統の序章を見学致しました。これは千年の昔から二十年ごとに行われる伊勢神宮の式年遷宮行事であり、今年は第六十二回遷宮の始まりの年で、会場を訪れた六月三日は木曾の檜美林から始めて御用材が伐り出される「御杣始祭」の日でもありました。

日本のシンボルタワー「天空鎮守の森」を背景にした野外ステージには秩父屋台囃子を始め、さいたま市の宮町神輿、裏木曾付知の御樋代木奉曳車・伊勢音頭・木曾音頭等が参加し、ひときは秩父屋台囃子が愛・



地球広場全体に鳴り響き、多くの観客を魅了していました。

広場正面の巨大スクリーンには御杣始祭・秩父屋台囃子・神輿が映し出され、まさに日本の伝統文化を再確認致しました。

二日目は、伊勢神宮御垣内参拝。伊勢神宮は、内宮に皇室の御親神様である天照大御神、外宮には衣食住の神様である豊受大御神をお祀りされています。

はじめに外宮御垣内を参拝し、続いて内宮御垣内を参拝致しました。宇治橋の大鳥居をくぐり抜け五十鈴川の御手洗場で心身を清め、大きな木々と緑綺麗な参道を正宮へ向け進んで行くと唯一神明造りの社殿が目に入ってきました。誠に心の引き

締まる思いが致しました。神職の方に案内され、お祓いの後厳肅の中、内宮御垣内へ進み秩父神社浅見欄干様にあわせ皆一同深々と心より拝礼致しました。

参拝後は神職の方による神宮についての説明を聞き、神宮の素晴らしいさに感動致しました。

地球環境、森・自然との共生、伝統文化の保存継承の大切さを改めて感じました。

最後に秩父神社及び関係各位の皆様方のご配慮により今回の研修旅行が大変有意義なものとなりましたこと感謝致します。



退職のご挨拶

前権禰宣 枝窪邦茂



昭和六十年四月より秩父神社に奉職させて頂き、二十年の年が経ちましたが、

三月末日をもって退職することになりました。

昨年より父の身体の具合が悪くなり、家に帰るようにと話をされたのは一月下旬でした。宮司さん、禰宜さんにお話し申し上げ、三月末での退職を承知戴きました。

学校を卒業して秩父神社にお世話になり、神職として基礎からの心得を先輩方々に教えて戴きました。秩父地域の祭典を数々奉仕し経験しました。なかでも川瀬祭り、夜祭を奉仕出来た事は、神職としての大きな誇りでありました。

生まれ故郷、入間市の三輪神社宮司を拝命し、より一層の努力を致す所存です。諸先輩の御計らいにより、神職身分を二級に昇進させて頂き、身の引き締まる思いです。秩父神社、氏子崇敬者ご関係の皆様、二十年間大変お世話になりました。

梟だより



◆ 藺田稔宮司 神職身分特級昇進



神社本庁は、二月三日の設立記念日に合わせて平成十六年度の神社本庁定例表彰者を発表し、神社本庁表彰規定第二条第二号人格識見共ニ勝レ多年奉仕神社ノ経営並ニ神徳ノ発揚ニ力ヲイタスト共ニ斯道ノ為ニ貢献スル処多ク功績顕著ナル者と認められ、当社藺田稔宮司は神職身分特級昇進となり、同二十五日神社本庁に於いて授与式が開催され、神社本庁統理久邇邦昭様より伝達が行われました。

◆ 秩父の春を彩る芝桜まつり

春の観光スポットとして、およそ百万人の観光客を集客する秩父羊山（ひつじやま）公園の芝桜。年々秩父を訪れる方も増え、開花シーズンに合わせて様々な企画が開催されました。



本年、当社崇敬会館・平成殿一階において秩父高等学校の生徒による箏曲演奏会、また、神楽殿においては、地元小中学生による秩父歌舞伎「白浪五人男」の上演、さらには秩父銘仙フラッシュショーが開催され、羊山の芝桜同様美しい可憐な花々が、境内に花を添えて戴き、参拝の方々に楽しませていました。

◆ 秩父の御幣・紙垂等の勉強会開催

去る七月五日、秩父神社平成殿集会室におきまして、埼玉県神社庁教化委員会 祭儀研究部会（部長 当社 大澤 孝権禰宜）主催により

ます「秩父の「御幣」「紙垂」などの勉強会」が開催されました。

先より祭儀研究部会では、県内各地の特色ある「御幣」や「紙垂」類の実地調査アンケートを実施しており、この度の勉強会はその先駆けとして秩父地方の一例から当社における代表的な夏の川瀬祭や冬の大祭・夜祭に奉製される大幣や紙垂などの特色を、当社大澤権禰宜と神社庁の高橋学芸員から解説されました。

この祭儀研究部会の調査結果は、平成十九年三月予定の教養研修会において発表されるといふことです。



◆ 秩父神社妙見講

自 平成十七年 二月
至 平成十七年 六月

二月二十三日 宮側講
長谷川正雄講元外六十八名
三月二十七日 幸手妙見講
東 大講元外三十九名
四月二十日 皆野妙見講
豊田スエ講元外二百九十一名
五月一日 上蔭田妙見講
前原啓作講元外四十二名
五月八日 原谷講
中西貞夫講元外四百九十六名
五月十五日 近戸講
鳥塚金男講元外百六十五名

五月三十一日 中宮地講

高野文吉講元外二百四十一名

六月十一日 日野田妙見講

荒船啓介講元外二百四十七名

六月十二日 熊木講

高畑芳久講元外二百三十一名

六月十九日 下宮地講

六月十九日 別所講

原嶋 信義講元外九十七名

六月二十五日 本町講

守屋 英雄講元外百三十三名

六月二十六日 下郷講

新井征一郎講元外四百六十三名

◆ 柞乃杜神前結婚式報告

秩父市荒川白久 小池大介・佳美様
東京都杉並区 加藤昌彦・恵美子様
秩父市東町 田端 誠・清子様
秩父市野坂町 矢尾琢也・雅美様
東京都豊島区 手島 弘・紗耶加様
秩父市番場町 浅見貴之・笑美子様
秩父市日野町 四方田昌浩・綾子様
群馬県前橋市 坂本英祐・美奈様
秩父市荒川日野 新井幸雄・敬子様
秩父市中村町 新井勇貴・直子様
横瀬町横瀬 長島 隆・倍江様
アメリカ合衆国 横田文彦・志麻様
秩父市寺尾 浅見一幸・晴美様
未永く幸せな家庭をお築き戴きますよう
お祈り致します。

◆ 職員辞令

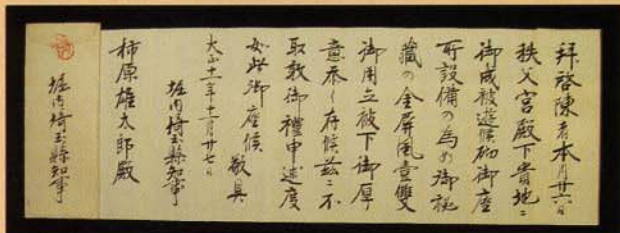
権禰宜 枝窪 邦茂 願いにより職を免す。

◆ 思い出の品 金屏風一雙

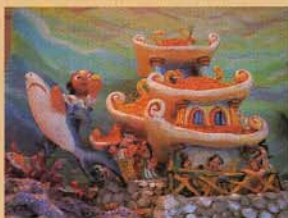


する当社にご奉納いただき、またこの度、柿原氏のご子息より、当時の堀内埼玉県知事から柿原雄太郎氏に届けられました御礼のお手紙もお預かり致し、当社にて収蔵させて戴くことになりましたのでご報告致します。

この金屏風一雙は、明治三十五年六月二十五日、大正天皇第二皇子として淳宮雍仁親王殿下がご誕生になり、その二十年後の大正十一年、ご成人に達せられ「秩父宮家」を創立され、同年十一月二十六日に、はじめて秩父にお成りあそばされる際に、地元名家で、当社大総代でもありました故柿原雄太郎氏が、ご用立て下さった秘蔵の金屏風です。後に、秩父宮様をお祀り



◆ 親子で楽しむ神話の世界展



平成十七年五月一日から十五日の間、平成殿二階展示ホールにおいて、「親子で楽しむ神話の世界」が開催されました。児童絵本作家であるたたらなつき氏が制作した立体造形で、木花佐久夜毘売、豊玉毘売神、源能基呂島、三人の神誕生、黄泉の国、わがままスサノオ、ヤマタノオロチ、うみさち、やまさち、オオクニヌシの試練、タケルがゆく、八咫鳥などの作品が展示され、なんと

たのしみ、温かみのある色彩で見ると神話の世界へと誘ってくれます。また、この開催に際しては、秩父市教育委員会の後援も戴き、多くの家族連れの方々が来場し楽しんで戴きました。



ぼのとした表情と温かみのある色彩で見ると神話の世界へと誘ってくれます。また、この開催に際しては、秩父市教育委員会の後援も戴き、多くの家族連れの方々が来場し楽しんで戴きました。



第5回 秩父まほろばシンポジウムのご案内

日時：平成17年8月20日（土）午後1時
会場：秩父神社参集殿 2階
主題：地域おこしは鎮守の森から～ふるさと鎮守の森プロジェクトの提言～
主催：秩父未来会議（代表 園田 稔）

参加無料

編集後記



※本報の用紙はグリーン・ユトリロマット100の再生紙を使用しています

■私たち日本人は古くから蛙に親近感をもつてきました。蛙や兎たちが戯れる様を擬人化し、鳥羽僧正作と伝わる国宝・鳥獣人物戯画は皆さんご承知のとおり、また、近年では宮崎駿監督作品「千と千尋の神隠し」でも様々な蛙たちが、八百万の神々の疲れを癒す銭湯で活躍奮闘していたのは記憶に新しいところです。

■編集担当者の個人的な調査で、幕末から明治中期にかけて、狩野派や、浮世絵、百鬼夜行の妖怪まで幅広い流派の技法を描く天才日本画家・河鍋曉斎を訪ね、埼玉県蕨市にある河鍋曉斎記念美術館を訪れた時、「かえるミュージアム」（かえるの友の会）が開設されており、蛙に関するものが世界各国から収集され大変驚きました。曉斎自身三歳から蛙を描きはじめ、蛙をモチーフにした作品を数多く残しており、興味のあつた方は是非一度足を運んでみて下さい。そう言えば、古館先生も、この会に入会していたことがつております。

平成十七年（二〇〇五）七月二〇日
編集 秩父神社社務所
〒360-0044 埼玉県秩父市番場町一三
TEL 〇四九四 二二一〇二六二
FAX 〇四九四 二四一五五九六
印刷所 有限会社 城文社印刷所
〒360-0044 秩父市東町二七一八